

Title	新しい世界史とヨーロッパ史
Author(s)	羽田, 正
Citation	パブリック・ヒストリー. 2010, 7, p. 1-9
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66474
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

新しい世界史とヨーロッパ史

羽田 正

1 新しい世界史の創造

インド史研究者から転じて環境の世界史に関する大著を執筆したリチャーズは、2003年に出版されたその著書の序文で、「世界史」について次のように記している。

なぜ世界史かという問いに答える際に私が好んで用いる論法は、歴史によって帰属意識とそれに基づく行動が決まるというものである。歴史の叙述と教育によって、人々の社会的な帰属意識が育まれ行動が定まってゆくのだ。私たちは、地球への共通の帰属意識 (global identity) を絶対的に必要としている。それは、人類の共通の過去⁽¹⁾についての知識と知恵から引き出されるものである。

2006年の初め頃だったか、はじめてこの文章を読んだ時、私はドキッと、そして無性にうれしくなった。ちょうど『思想』や『UP』に、現代日本における世界史認識は全体として時代遅れで、いまや「世界は一つ」を実感させるような新しい世界史を追求せねばならないという趣旨の短文を寄稿した頃のことである⁽²⁾。書いてはみたものの、果たして一介の歴史学者がたった一人でこんな大胆なことを言ってよいものだろうか、同僚や世間は理解し、支持してくれるのだろうかと内心ではかなり不安に思っていた。その一方で、このような新しい歴史研究の方法を主張しているのは、世界で私一人だけだというひそかな自負もあった。リチャーズの文章は、私のこの漠然とした不安とひとりよがりの自負を一挙に吹き飛ばすものだった。『イスラーム世界の創造⁽³⁾』を執筆する段階から散々苦しんだ末に私がようやくたどり着いた結論と

(1) Richards, J. E., *The Unending Frontier. An Environmental History of the Early Modern World*, Los Angeles, University of California Press, 2003, p. xiii.

(2) 羽田正「現代歴史学の創成」『思想』982、2006年、羽田正「「有用な歴史学」と世界史」『UP』400、2006年

(3) 羽田正『イスラーム世界の創造』東京大学出版会、2005年

同じ内容をこんなに明快に論じ、すでに大著をものした人がいる！私は舌を巻いた。と同時に頼りがいのある同志を発見し、大いに意を強くした。そして、新しい世界史を真剣に考えようと覚悟を決めた。私が入から専門分野を尋ねられると、「世界史です」と答えることにしたのは、この文章に接して以後のことである。

歴史学の研究においては、国や地域別、さらにはそれぞれの時代別に分析や考察を進めるのが当然だと長く考えられてきた。ある国や民族が人類普遍の発展段階のどの位置にあるのかを見極めようとしたマルクス主義歴史学もその例外ではない。ヨーロッパと非ヨーロッパを区分し、ヨーロッパ史すなわち世界史ととらえたヘーゲルやランケを別とすれば、「世界史」が固有の研究分野だと考えられたことは、内外を問わずこれまでほとんどなかった。マニングが言うように、1850年から2000年までの150年間、歴史研究の主流は国民国家史だったのである。⁽⁴⁾ヨーロッパ諸国では、現在でも自国史を中心とした「歴史」が研究・教育され、「世界史」という枠組みが意識されることはほとんどない。アジア諸国やアメリカのように「世界史(world history)」の教育が行われている場所でも、それは国や地域または文明圏の歴史を束ねただけのものとしてとらえられていることが多い。

国や地域単位で歴史を把握する人々が、それらを束ねた世界史を全体としてどう描くか、逆に、所与のものである世界史全体の中で自分が専門とする国や地域の歴史はどう位置づけられるかといった問題を扱うときだけ、世界史という大枠が意識される。例えば、第二次世界大戦後の日本で、高等学校の科目に「世界史」が創設された際に沸き起こった活発な論争はその典型である。進歩し先行する「西洋(しばしば欧米と同義)」が主導する世界史(それ自体に再検討の余地はない)の中に、日本の歴史をどう位置づけるかが当時の議論の中心だったからである。⁽⁵⁾しかし、時代は変わった。私たちはいまや過去を振り返る際に常に世界史を意識せねばならない。その世界史はすでに私たちが知っているものではない。これから私たちが創ってゆかねばならないものである。

2 ヨーロッパ中心史観克服の試み

すでに私たちが知っている世界史の問題点としてしばしば指摘されるのが、悪名高いヨーロッパ中心史観である。マルクスは、この見方の本質を簡潔に次のように語る。

ヨーロッパが歴史を作る。世界のその他の地域の場合は、ヨーロッパがそこと接触するま

(4) Manning, P., *Navigating World History. Historians Create a Global Past*, Palgrave Macmillan, New York and Basingstoke, Hampshire, 2003, p. 10. この20-30年、主として英語圏の歴史学者の一部が、このテーマに本格的に取り組むようになってきたが、彼らの運動は歴史学研究全体の中で決して主流となっているわけではない。なお、歴史学界の傾向とは異なり、「世界史」を哲学的に論じることは、これまでもしばしば行われてきた。戦前、戦中の日本における「世界史の哲学」はそのような動きの一つである。

(5) その典型的な作品として、上原専祿らによる『日本国民の世界史』岩波書店、1960年を挙げることができる。

で歴史はない。ヨーロッパが中心である。世界のその他の地域はその周辺である。⁽⁶⁾

人間の平等という考え方が積極的な価値を持ち、実際にヨーロッパ諸国の意志だけで世界中の人々の生活が動いているわけではないことが明らかな現代世界において、ヨーロッパと非ヨーロッパを区分しヨーロッパの絶対的な優位性を強調するこのような歴史の見方は、もはや支持されない。非ヨーロッパ世界ではかなり前から、そして欧米でも最近になって、ヨーロッパ中心史観的な歴史の見方を強く批判し、世界史の書き換えを提唱する研究者が多くなってきた。彼らは、次に述べるような、相互に関連する二つの方法によって、ヨーロッパ中心史観の克服に取り組んでいる。

第一は、ヨーロッパだけではなく世界の他の部分（非ヨーロッパ）も独自の歴史を持ち、ヨーロッパとそれら他地域の歴史が緊密に結びついていたということを示す方法である。この方法は、「文明圏」という考え方を打ち出した1930年代のトインビーによる『歴史の研究』（1933-39年）を嚆矢とし、戦後には日本でも採用されて世界史理解の主流となって洗練の度合いを深めてきた。⁽⁷⁾ 現代日本の高校で教えられる世界史の基本的な立場はこれである。簡単に要約すると、過去にはヨーロッパを含む複数の文明圏ないし地域世界が並行的に存在し、時とともにそれらの間の接触と交流が次第に緊密となった。そして、16世紀以後のヨーロッパの人々の世界中への進出によって世界の一体化と構造化が進んだということになるだろう。

ヨーロッパ中心史観を相対化するもう一つの方法は、上のとらえ方と関連して、ヨーロッパという地域世界の勃興と優位が、長い人類の歴史の中でのほんの一時的な現象にすぎないということ強調することである。例えば、フランクは18世紀まではアジアが世界経済の中心であり、近い将来またその位置を回復すると主張し、ポメラントは18世紀半ばのイングランドと中国の江南デルタ地域における経済状態が驚くほど似ていることを指摘し、その時まで資本蓄積、健康状態、出生率、技術など人の生活水準のどの面においても、ヨーロッパの数量的な優位を示す材料は見つからないと論じた。⁽⁸⁾

マルクスは、この二つの方法を組み合わせそれに最近の環境史の成果を加えて、ヨーロッパ中心主義を脱した世界史を叙述しようとした。⁽⁹⁾ 『歴史の窃盗』におけるグディの主張も、基本的にこれらの研究者たちと同様である。⁽¹⁰⁾ 彼は、ヨーロッパの社会学者が用いる概念、理論、方法におけるヨーロッパ中心主義的偏向を厳しく批判し、ヨーロッパの歴史は決して特別で例

(6) Marks, R. B., *The Origins of the Modern World. A Global and Ecological Narrative from the Fifteenth to the Twenty-first Century* (Second Edition), Oxford, Rowman & Littlefield Publishers, 2007(First Edition 2002), pp. 8-9.

(7) 縮刷版の『歴史の研究』（1946年刊行）の邦訳が出版されたのは、1949年である。嶮山政道、阿部行蔵訳『歴史の研究』1-3、社会思想研究会出版部、1949-52年

(8) Frank, A. G., *ReOrient. Global Economy in the Asian Age*, Berkeley, University of California Press, 1998（邦訳『リオリエント——アジア時代のグローバル・エコノミー』山下範久訳、藤原書店、2000年）、Pomeranz, K., *The Great Divergence. China, Europe, and the Making of the Modern World Economy*, Princeton University Press, 2000.

(9) 上掲 Marks, *The Origins of the Modern World*.

(10) Goody, J., *The Theft of History*, Cambridge University Press, 2006.

外的ではないと論じる。グディによれば、社会学者がヨーロッパの過去にのみ見出したと信じている事象は、ユーラシアの歴史のどこでも発見することができ、それゆえ、ヨーロッパの独自性などは存在しないということになる。グディは、ヨーロッパが達成した比較優位を説明しようとする歴史学者は、過去を目的論的にとらえすぎており、ユーラシアの他の地域で生じている同様の出来事に眼が向かないのだという。つまり、優位にある現在から過去を見るため、過去もすべて特別で優位に見えるというわけである。彼の批判は激烈で、古代、封建制度、ルネッサンス、産業化、資本主義など、これまでヨーロッパ史にだけ現れるとされてきた要素や指標のすべては、ヨーロッパ史に特有のものではないので、一旦捨て去らねばならないとまで主張する。ヨーロッパ史の歴史的指標を無条件に中国史に適用することに異議を唱え、中立的な立場から中国とヨーロッパの歴史を比較すべきだと提唱するビン・ウォンの意見は、もっとソフトだが、グディの主張に近いともいえるだろう。⁽¹¹⁾

3 ヨーロッパ中心史観の核心

これらの論者の刺激的で説得的な議論を読むと、あの根強いヨーロッパ中心史観もついに克服される日が来たかと思う人が多いに違いない。しかし、本当にそう言えるだろうか。私はそうは思わない。

日本の歴史研究者は、第二次世界大戦終了後かれこれ50年以上に亘ってヨーロッパ中心史観の克服に取り組んできた。しかし、現在の日本における世界史理解はこの史観と無縁だと断定できるだろうか。「欧米と比べて日本は…」、「欧米に追いつかねばならない」、「欧米を見習わねばならない」といった類の論説は、今日でも後を絶たない。ハプスブルク家に関する展覧会を開けば、なぜか人が押し寄せる。British Museumに「大英博物館」という訳語をあてたまま疑問を持たない。江戸時代の長崎は、実際はほとんど中国貿易の港であったにも関わらず、「ヨーロッパ文明の窓口」と繰り返し強調される。九州各地で、オランダ船やポルトガル船がかつて来航した場所の自治体は、それを記念し、これらの国の都市と姉妹都市協定を結びたがる。そして何よりも、ヨーロッパ諸国の研究者の自国史研究の水準に追いつき、彼らと同じ土俵で対等に議論できる関係を目指す西洋史の学界！私たちの周りは、いまなおヨーロッパ中心史観が生み出す言説や行動に満ちている。ヨーロッパは複数の文化圏のうちの一つとはなったが、依然として特別な位置を保ち、その時系列的な歴史叙述は大きな変更を加えられることなく温存されている。⁽¹²⁾ 度重なる厳しい批判にも関わらず、ヨーロッパ中心史観はそう簡単になくならない。それはどうしてなのだろう。

回答の一つは簡単である。歴史はそれを叙述し、読む人々の立場を代弁する。一つの人間集団の歴史は、当然その集団を中心にして描かれる。「ヨーロッパ」に帰属意識を持つ人々が「ヨーロッ

(11) Bin Wong, R., *China Transformed. Historical Change and the Limits of European Experience*, Cornell University Press, 1997.

(12) 事情は欧米でも変わらないはずである。グディの厳しい批判は、裏を返せば、歴史研究者や社会科学研究者の間で、ヨーロッパ中心史観が依然として大きな影響力を持っているということを示しているからだろう。

パ」に帰属意識を持つ人々のために歴史を記せば、それはどうしてもヨーロッパ中心史観となるのだ。中国中心史観、イスラーム中心史観、それに日本中心史観などなど、歴史叙述や歴史認識における「中心史観」の例は他にも事欠かない。その意味で、ヨーロッパ中心史観は決して特殊ではない。問題は、それが地理的にも人間集団的にも「ヨーロッパ」という範疇には入らない人々にも受け入れられ、彼らの考え方や世界の見方に影響を与えている点にあるのだ。

だが、それにもましてヨーロッパ中心史観が健在である最大の理由は、「ヨーロッパ」という概念そのものが持つ意味にあるのではないだろうか。上に挙げたような二つの方法を用いたこれまでの研究は、世界史におけるヨーロッパの優位性や特殊性を相対化することには十分成功した。多くの歴史理解や叙述が見直され、修正を迫られた。しかし、これらの研究は、触れなければならない問題の核心を見えにくくしているだけではないかと私は思う。その核心とは、「19世紀にはヨーロッパが決定的な優位にあった、ヨーロッパが勝者であり、他は敗者となった」とみる歴史理解である。いくら18世紀以前の時代は他地域と変わらなかったと説いても、いくらヨーロッパの優位が一時的だと主張しても、これらの研究成果に従えば、結局19世紀にはヨーロッパはやはり特別であり、他地域とは異なっていたという話になるのである。この核心部分を温存する限り、ヨーロッパの優位と特殊性を唱えるヨーロッパ中心史観の根幹は、まったく揺るがないだろう。

4 「ヨーロッパ」という概念の問題点

ヨーロッパ中心史観を批判する研究者たちは、なぜかヨーロッパという概念そのものの意味と存在を疑ってはいない。あれだけ厳しくヨーロッパ史上の種々の概念の再考を迫るグディも、「ヨーロッパ」という概念については何も論じていない。彼らにとって、ヨーロッパは現実の存在としてすでにそこにあるのである。しかし、ヨーロッパ中心史観を批判するなら、まずヨーロッパという概念そのものとその歴史がなぜ記されるのかという問題を、原点に立ち戻って考えてみるべきではないかと私は思う。

「ヨーロッパ」という単語の多くの側面のうち、もっとも重要なポイントは、この単語が地理的な空間を指示するとともに、抽象的な概念でもあるということである。単語自身の起源は古代ギリシアまでさかのぼり、当初から地理的な意味を持っていた⁽¹³⁾。一方、概念としての「ヨーロッパ」の意味内容は、19世紀の前半から半ばになってようやく固まった。進歩、民主主義、自由、平等、科学、世俗、そして普遍など当時考えられるあらゆる正の価値が「ヨーロッパ」

(13) この論文は「ヨーロッパ」の語義やその変遷を詳細に検討することを目的とはしていない。この語とヨーロッパ中心主義については、デイヴィスの簡潔なまとめが、現代イギリスの研究者の標準的な意見として参照されるべきである (Davies, N., *Europe. A History*, Oxford University Press, 1996, pp. 7-19)。やや古いが、フェーヴルによるコレージュ・ド・フランスでの講義録 (1944-45年) も参考になる。リュシアン・フェーヴル著、長谷川輝夫訳『「ヨーロッパ」とは何か?』刀水書房、2008年。日本におけるヨーロッパ論は枚挙にいとまがないが、問題の所在を明らかにしたものとして、増田四郎『ヨーロッパとは何か』岩波新書、1967年、谷川稔 (編)『歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ』山川出版社、2003年をあげておく。

の属性とみなされ、複合的で独特の概念が形成された。それが、地理的なヨーロッパという空間に住む人々の社会の特徴を必ずしも表しているわけではないということに注意しなければならない。これはあくまでも概念なのである。「ヨーロッパ」は、対抗概念として反対の意味を持つ「オリエント（東洋）」や「アジア」、さらに「イスラーム世界」などを想定することによって、さらに明確なイメージを結ぶものとなっていった。⁽¹⁴⁾

近代歴史学の祖とされるランケが、初期の著作を公にしたのは、1820-30年代のことである。厳密な史料批判と堅牢な論理構成を特徴とする近代歴史学には、イデオロギーを実体化するという大きな特徴があることを、私はこれまで繰り返し述べてきた。「ドイツ」の歴史が書ければ、⁽¹⁵⁾「ドイツ」という国は実在すると考えられる。「ドイツ」という国がある以上、その歴史もまた書けるはずなのだ。イデオロギーとしての国民国家とその歴史は、一枚のコインの裏表である。

ちょうど同じ頃に形成されつつあった「ヨーロッパ」という概念（これも一種のイデオロギーである）とその歴史についても、同じことがいえるだろう。「ヨーロッパ」が存在すると信じる人々にとって、その歴史の存在に議論の余地はなかった。

デイヴィスによると、最も早いヨーロッパ史のまとまった叙述は、フランスの作家であり政治家でもあったフランソワ・ギゾの『ヨーロッパにおける文明の歴史』（1828-30年刊行）⁽¹⁶⁾だという。これ以後、概念としてのヨーロッパの属性であるすべての正の価値の起源が、地理的なヨーロッパの過去の中に求められ、発見され、時系列に沿って説明されてゆく。進歩や普遍は新大陸の発見や啓蒙に、民主主義や共和制は「古代」に、世俗は宗教改革に、科学はルネッサンスに、自由や平等はアメリカ独立宣言やフランス人権宣言に淵源を持つこととなった。それは、国民国家の歴史が、その国家の領域内での事象を時系列的に解釈し説明することによって創造されていったのと同じことだった。

ヨーロッパ概念が洗練度を増してゆくにつれて、これと表裏一体の関係にあるヨーロッパ史の叙述方法も次第に確立していった。それは地理的な範囲のヨーロッパで生じた正の価値を含む事象を、進歩と普遍を前提として時系列的に解釈し、理解することだった。19世紀に創造されたヨーロッパ史においては、ギリシアやローマが当時どのような状態にあったのかは問題とはならない。16世紀に「ヨーロッパ」の世界進出の先兵となったスペインやポルトガルの場合も同様である。これらの国々は、19世紀には決して概念としてのヨーロッパにあてはまる状態にあったわけではない。むしろ、非ヨーロッパと言ってもよい存在だったはずである。しかし、地理的なヨーロッパの内部にあり、「ヨーロッパ」の属性である価値の一部をかつて体現したことがあったという点で、これらの地域とその過去はヨーロッパ史に不可欠な要素だったのである。

(14) この点については、拙著『イスラーム世界の創造』の第Ⅱ部「近代ヨーロッパと「イスラーム世界」」で詳しく論じた。

(15) 注2で挙げた『思想』『UP』所収の論文、それに、「イスラーム世界」と新しい世界史 水島司（編）『グローバル・ヒストリーの挑戦』山川出版社、2008年などを参照。

(16) Davies, *Europe*, p. 15.

あらゆる正の価値を体現するヨーロッパという概念は、時代が進むにつれて、新たな正の価値を取り入れて変質してゆく。現代では、人権 (human rights) や多様性 (diversity) が、ヨーロッパを代表する価値としてしばしば言及されている。創造から2世紀を経て具体的な意味内容は多少変化したが、自と他を分け、自の他に対する優位性と進歩性を前提として成立するヨーロッパという概念の根底部分は、現代に至るまで変わっていないと見るべきだろう。ヨーロッパ連合 (EU) へのトルコの加盟をめぐる議論で、人権や民主主義が大きな問題となっていることからそれが窺える。ヨーロッパに帰属意識を持つ人々の多くにとっては、現在でも、世界は優位なヨーロッパとそれ以外からなっているのである。

以上は、肌理の粗い素描でしかないが、問題が、ヨーロッパという概念の根底部分にあるということは了解できるはずである。その意味で、ヨーロッパ中心主義を批判する人々が、いくらヨーロッパ史の見直しを試みても無駄である。他と比べて、常に優位にあるのがヨーロッパである以上、ヨーロッパ史はヨーロッパ中心史観に基づいて叙述されざるをえないからである。新しい世界史との関係で、ヨーロッパ史が問題になるのは、正にこの点なのである。

5 私たちの世界史へ

自分は地球市民の一員だと人々が確信できるような世界史を、私たちはどうすれば描けるだろう。とてつもなく難しいことのように思える。しかし、時代は確実にそれを必要としている。新しい世界史を構想し叙述するために、私たちは努力を傾けなければならない。新しい世界史は、世界全体を一つの単位として叙述することが肝要である⁽¹⁷⁾。地球市民の歴史である以上、その叙述に「彼らの歴史」的要素が含まれてはならない。目指すのはあくまでも「私たちの歴史」である⁽¹⁸⁾。

その際に最大のポイントとなるのは、従来ヨーロッパ中心主義の隠れ蓑として巧妙に使われてきた「文明」や「文明圏」という概念を見直すことである。文明圏によって人類社会を細分する方法をあらため、人類の過去を一つのものとして描くべきなのだ。その際、自他を区別する「ヨーロッパ」という概念とその実体化の手段である既存の「ヨーロッパ史」の脱構築は、第一に行わねばならないことだろう。従来「ヨーロッパ史」という一つの枠組みの中に置かれ解釈されてきた過去の諸事象を、一旦個々のパーツに分解するのである。ばらばらになったパーツのうちで、新しい世界史の文脈で重要なものは再利用されるだろうし、必要ないものは忘れ去られるだろう。

(17) この点は、マルクスも強調している。Marks, *The Origins of the Modern World*, p. 15.

(18) このように書いたからといって、私は世界史だけが「私たちの歴史」を標榜できると主張しているわけではない。日本史もヨーロッパ史も、「私たちの歴史」である点に変わりはない。現代の人々は複数の帰属意識を持っているのが普通である。それらのうちでもっとも重要であるにもかかわらず、まだあまり意識されることのない「地球市民」としての帰属意識を強固なものとするために、新しい世界史が必要であるというのが私の考えである。

同様の作業は、いわゆる「イスラーム世界史」についても行われねばならない。「ヨーロッパ」や「イスラーム世界」の歴史に特有な事象を強調するのではなく、両者に共通する点こそが発見され、世界史の文脈で解釈されるべきなのである。新しい世界史を構築する前の段階として、別々に語られてきた既存のヨーロッパ史とイスラーム世界史を、西方ユーラシアの歴史として一体のものとして描く努力をしてみることも有効だろう⁽¹⁹⁾。そうすれば、古代ギリシアの学問が一旦「イスラーム世界」に保存され、それが後に「ヨーロッパ」に再びもたらされた、その点でイスラーム文明にも歴史的に意味があったというようなヨーロッパ中心史観的な解釈はもはや顧みられなくなるに違いない。

マニングは、世界史を「しばしば異なっていると考えられる諸システムの中の歴史的な関係性に焦点を絞る研究分野」と定義している⁽²⁰⁾。つまり、地球上で起こった様々な事象が互いにつながりあっているさまを研究し、叙述するのが世界史だというのである。私はこの意見に原則として賛成である。しかし、彼のいう「諸システム」が従来のような「ヨーロッパ」や「イスラーム世界」という文明圏を意味するのなら、その結果生み出される世界史は、表面的な目新しさを別とすれば、根本的な見方や枠組みという点では、従来のものとはさほど変わらないだろう。そこでは、ヨーロッパ中心史観は決してなくなるならない。

これまでの歴史学は、人間集団ごとの歴史を描くことによって、集団間の特徴の違いを指摘することを得意としてきた。それは日本史のような国民国家史の場合であれ、ヨーロッパ史のような文明史、あるいは地域世界史の場合であれ、同じことである。発想の転換が必要なのだ。今後、私たちは既存の歴史叙述の枠組みにとらわれず、人類の過去における共通の要素を捜し求め、それらをもとに新しい世界史を構築してゆくべきである。

この作業を志向する限り、人文社会系の学問が何の役に立つのかという質問には、きわめて簡単に答えることができるだろう。それは「地球市民」という現代にふさわしい新しいアイデンティティを生み出すことに大きく貢献するのである。史料の残存状況や研究の言語の点などで、大きな障害があることは間違いない。しかし、難しいからといって、いままでの場所にとどまっていてよいわけではない。いまその方向へ一歩を踏み出さなければ、歴史学は何のためか学問として存在するのかわかれたとき、どう答えるのか。

新しい世界史を構想するに際して、日本の歴史研究は大きな利点を有している。区分自体に大きな問題をはらんではいないが、この国では、すでに100年以上に亘って日本史、東洋史、西洋史という三つの枠組みの下でバランスよく世界各地・各時代の過去が研究されてきた。日本語で記された研究成果は膨大な数に上っている。歴史学と東洋学が異なった学問分野として人

(19) 三木亘はすでに類似の試みを実践している。『世界史の第二ラウンドは可能か——イスラーム世界の視点から』平凡社、1998年。しかし、その題名が示すように、「イスラーム世界」という言葉が無前提に使用されており、逆にイスラーム中心史観的に読める叙述がないわけではない。

(20) Manning, *Navigating World History*, p. 7.

類の過去を別々に検討するヨーロッパ諸国の場合とは異なり、日本の研究は、すべて近代歴史学の方法を用いて行われている。⁽²¹⁾ 国別や地域別に解釈、説明されてきた従来の研究を世界史の文脈で読み直すことが必要ではあるが、日本人の歴史研究者はヨーロッパ諸国の同業者に比べると、新しい世界史を構築するための材料を相対的に容易に得ることができるはずである。⁽²²⁾

桃木至朗が的確に批判するように、日本の歴史研究に特徴的な欠点もある。⁽²³⁾ すなわち細かい実証にのみ関心を示し、大きな議論の枠組みを示せない研究が多い、ヨーロッパ諸国における研究と同じ枠組みの西洋史の研究は、当然「ヨーロッパ」という概念について、ヨーロッパ諸国における研究と同様の欠陥を持っている、日本語だけで百年以上に亘って研究を積み重ねてきたため、日本語でしか意味をなさない術語や概念が存在する、などなど。もちろん、これらの欠陥は、意識的に克服されねばならないだろう。

私は 2009 年度から日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 S の交付を受け、「ユーラシアの近代と新しい世界史叙述」と題する共同研究を開始した。ヨーロッパとアジア、近代と前近代に二分して説明、叙述されるのが常だった 18-19 世紀のユーラシアの歴史理解を見直し、一体としてのユーラシアの歴史をどのように描くかを考えるプロジェクトである。この共同研究には、日本史・東洋史・西洋史の分野を問わず、研究者や大学院博士課程の学生が 50 人以上参加している。⁽²⁴⁾ 共同研究者同士の研究会、外国人研究者も含めたワークショップや国際会議を積み重ね、5 年後には新しい発想に基づく 18-19 世紀のユーラシア史理解を提案することを目標としている。私はこのプロジェクトを歴史学のための新しい運動だと考えている。大阪大学の世界史講座を中心とするグローバル・ヒストリー研究などと連動させ、さらに多くの同志を募って、大きな流れを作り出して行ければ素晴らしいと思う。世界の未来のために、次世代の歴史学のために、いまが踏ん張りどころである。

(21) 羽田正「東洋学・歴史学とイスラーム地域研究」佐藤次高（編）『イスラーム地域研究の可能性』東京大学出版会、2003 年

(22) アメリカ合衆国では、ほとんどの場合、日本と同様に歴史学部ですべての国、地域の歴史が教育研究されている。その意味で、アメリカと英語圏の研究者は、日本とほぼ同じ立場にあるともいえる。アメリカの歴史研究には、漢字資料を用いた歴史研究にはっきりとした弱みがあったが、この弱点は急速に解消されつつある。私たちがこのまま指をくわえていると、間もなく英語圏の研究が標準世界史を創り出してしまおうだろう。

(23) 桃木至朗「歴史学の危機と 21 世紀の挑戦」『世界システムと海域アジア交通』（阪大 21 世紀 COE「インターフェイスの人文科学」報告書第 4 巻）、2007 年、15-20 頁

(24) この共同研究には専用のウェブサイトが、英文、和文で設けられている。

<http://haneda.ioc.u-tokyo.ac.jp/eurasia/>, <http://haneda.ioc.u-tokyo.ac.jp/english/eurasia/>

関心をお持ちの方は、ぜひ遠慮なくご連絡いただきたい。